

大徳寺〔紫野にあり、禅刹龍宝山と号す〕

龍宝記略云 紺園は、平安城の乾方紫野にありて、西は鷹峰に抛り、東は比叡を俯して、般岡を南の界とし、賀

茂川を北に接す、地勢夷曠松檜蔚然たり、実に禅寂無塵の淨域にして、大燈国師の開く所なり。〔諱宗峰〕既に南

浦和尚〔大応国師〕に法を嗣て蹤を洛東雲居寺に止めて後こゝに移る、檀越赤松円心則村同じく則祐一院を創して

大燈国師を請ず、参問の縑素日に多く月に増益す。時に叡山の玄恵法印〔又洗心子と号す〕其党数人を倡て達磨宗

を破せんとて競来り、問難往來数条に逮ぶ、竟に宗峰の機鋒に当る事協はずして窟服し、稽して弟子の礼を執、

就中玄恵こゝろを禅に傾る事厚し、直に方丈を営て前罪を謝す。又宗印といふ者師に帰崇して諸堂を建て禅刹とな

す。其頃花園の法皇勅して入内を許し、輒ち禅要をもつて奏对叡慮に■ひ、忽龍床に登つて法を談じ、興禅大燈国

師を賜ふ。後醍醐帝礼敬特に深し、朝廷第一の祈祷所とし、屢禁臆に法座を設け国師を請じ陞座說法あり。天皇自

弟子と称し、投機の偈及び著語等の宸筆を給ふ。元亨三年天皇宸翰を染られ本朝無双の禅苑と称す。

開山大燈国師、名を宗峰、字を妙超といふ。父は播州浦上掃部助入道覚性なり。〔赤松円心の次男季房の女は浦上掃部

介覚性の室なり、是国師の母なり〕筑前転多崇福寺の五世とし、又但州祐徳寺を創し、建武四年丁丑臘月廿二日遷化

〔五十六歳〕雲門菴に塔す。

○大雄殿〔仏殿をいふ、本尊釈迦仏、額祈祷張即之筆、初めは当山二世徹翁和尚創す。応仁兵火の後、文明十一年一休

和尚泉南せんなんの宗臨そうりん及び同郷の寿源じゆげん（淡路屋某法名滴澗）再興し、同年六月落成す。又其後寛文五年那波常有弊陋なるをもつて一新す、今の堂これ也」

○演法堂えんほふだう〔初は赤松創す、亨徳年中回祿の後、江月和尚を帰依して稲葉正勝侯建立す。天井画龍狩野探幽筆〕

○土地堂どちだう〔梵天帝釈及び大小神祇伽藍神等を安ず〕

○祖師堂そしだう〔初祖菩提達磨、百丈、臨濟、開山大燈国師像を安ず〕

○經藏きやうざう〔京師那波宣且これを建て。藏經を贖て櫃中に藏む〕

○鐘樓しゆろう〔慶長十四年秋益田玄蕃頭元祥一新す、銘前建長言加書す〕

○浴室よく〔額張即之筆、再興二元和八年京師灰屋紹由これを建る〕

○敕使門ちやくしもん〔旧は九重の陽明門なり（南方正門）寛永十七年明正帝これを賜ふ。勅使来駕の時これより輿を入る〕

○明智門あけち〔方丈の南の門なり、明智光秀建立。伝云、光秀天正年中其君信長公を弑して、自ら命の保ざるべき事を知て、

白金千兩を当山に納て冥福を祈る、故に此門を建て其名を呼ぶ〕

○寢堂しんどう〔再興寛永七年、石州益田玄蕃頭藤元祥再興す、法名紹円又全牛と号す、長門侯に仕へて八千石を賜ふなり。

此堂初めの建立の施主詳ならず〕

○三解脱門げだつもん〔俗に山門といふ、東西十一間南北六間〕

額金毛閣〔張即之筆、閣上彩画長谷川等伯筆〕

〔本尊釈迦、阿難、迦葉、十六羅漢を安ず、釈迦三尊は旧龍翔寺大雄殿の安置仏なり、寺宇破壊に及んで当山に移す。十六羅漢は千ノ利休の寄附なり。今の三門は連歌師宗長の建る所なり、其後古溪和尚檀越千利休を勧て閣を門上に設く〕

金毛閣梁棟銘

帝徳高輝視壽城於万歳檀越泉南利休居士修造

祖風益盛開法門於無窮住山洛北春屋叟宗園敬白

春屋慶賀偈云

千門万户一時開月斧雲斤功大哉

踞地金毛高閣上学揚臨濟話頭来

〔連歌師宗長は宗祇の弟子にして、駿州島田の人なり、柴屋軒宗長と号し、老後今川義元の招請によつて、同州丸子駅

泉谷に幽居し、享祿五年三月六日歿す（八十五歳）くはしきは東海道名所函会に見へたり。宗長初当山真珠菴を建て、

其後諸堂を經營して悉く備れり、いまだ山門成ず。宗長云、われ今五十貫を施し費用の万一となさんとて、遂に秘蔵の

珍宝定家卿真筆の源氏物語を鬻て厥功を遂るなり〕

○方丈〔初め玄惠法印建る。応仁兵火の後泉南の宗臨及び寿源等方丈厨を建る。寛水十三年京師後藤縫殿益勝方丈の狭陋なるをもつて新に大方丈を造る、於是古方丈を移して庫院とす、方丈の額張即之筆〕

○客殿の襖〔墨絵山水〕狩野探幽筆

○雲門菴〔開山大燈国師の塔所なり、方丈の内にあり。額に曰、靈光 初めの額は、後醍醐天皇宸翰、享祿中に焼亡、

今揚る額は後土御門帝の宸翰なり。花園法皇御髮塔あり、法皇詔によつて御髮を小塔の中に納め、靈光塔に安ず〕

○起龍軒〔方丈の乾にあり〕○金剛軒〔僧堂の南にあり〕○看雲亭〔方丈の巽にあり〕

○明月橋〔仏殿と法堂との間にあり〕

○官池〔明月橋の東にあり。伝云、後醍醐帝当山に逍遙し給う時、眸をめぐらし指点して国師に宣ふ、此地正に一池を開くに可なり。因茲命じてこれを穿、故に官池となづく。又五老松といふあり、官池の北五松の大樹なり〕

○梅橋〔古梅ありて官池に横たふ、橋を架すが如し、故に名とす〕

○古巖松〔旧松已に枯れて其所を失す、今方丈南庭の松最秀可なり、故に此名をもつて呼ぶ〕

○瑞雲亭〔僧堂の南金剛軒の北にあり〕

○達磨峰〔未詳何峯〕或云指比叡山、是風景にして当境にあらざるなり。然以心境相對論之。右雲門菴已下

の十名は大徳寺の十境とす

大徳寺什宝虫干晒掛図

運庵虚堂南浦三祖自賛画像 うんあんき だうなんほ そしさん 三幅

大燈国師像 だいとう 一は自賛 ごだいご 二幅
一は後醍醐帝御賛

大燈国師投機頌 とうき 一幅

大燈国師垂問 ごだいご 後醍醐帝下語 両筆 一幅

後醍醐帝投機頌 一幅

大燈国師伝紫衣遺属語 一幅

大燈国師遺偈 一幅

大燈国師与フル徹翁ニ印証 徳禅什物 一幅

同 与ニ徹翁ニ号 徳禅什物 一幅

徹翁和尚与ニ言外ニ号 同 一幅

同 遺試偈 同 一幅

徹翁てつおう大祖だいそ 正眼しやうがん 禅師号 同 一幅

徹翁 天応 大現 国師号 同 一幅

大燈国師親写伝燈録 合為十五冊 卅卷

徹翁和尚親写臨濟録 徳禅什物 一卷

同 写舍利記 一卷

後醍醐帝宸筆朗詠 一卷

大燈国師菩提講敷地証文〔雲林院志中に在〕 一幅

同 草書簡 二幅

中正藏主草書簡

古懂和尚草書簡

大徳与ト南禅ト等位年号勘例 菊亭右大臣

虚堂墨跡寄附之記証

虚堂達磨忌拈香之墨跡 桑山果法院寄附 一幅

虚堂書簡 一幅

同 像 曇西澗筆 どんさいかん 衍右帆贊 えんうほん 一幅

仏眼像 自贊 一幅

後水尾院宸筆和歌 二幅

大燈像 一乘院真敬親王筆 一幅

觀音像 月壺筆 一幅

觀音龍虎猿鶴 牧溪筆 五幅

十王像 隆作忠筆 りくしんちゆう 十幅

十六羅漢像 兆殿司筆 十六幅

五百羅漢像 禪月等所_レ画 總見院什物 百幅

右は鎌倉寿福寺の什物なり其後相州小田原北条の手に入瑞溪寺に安ず北条亡びて後秀吉公取_ニ上_ゲ之_ヲ京師大仏殿の寺宝と成大仏殿は古溪和尚所_レ創_{スル}なり故に總見院什物となる今方丈に存す已上龍宝誌大意

徹翁像

大現国師号

正眼禪師号

言外号

正印禪師号

言外也

如意庵額

繪旨

繪旨

同遺誠偈

徹翁号

勅使問

同遺偈

印可状

蓮庵持名

鹿堂墨跡

鹿堂書額

持明院
宣旨

五山繪旨

後醍醐帝投機頌

開山示後醍醐帝法語

靈光額

開山投機頌

法衣所伝語

菩提講証

祈願所繪旨

高照加増繪旨

元弘三年宸翰

吹拳状繪旨

再興繪旨

開山遺偈

雲門庵

三百年繪旨

建武四年宸翰

開山墨跡

元弘四年繪旨

同

同

○龍光院名画墨蹟掛晒之図

開山像 自賛

後醍醐天皇宸翰朗詠

方丈卓の上

運庵像 自賛

大応像 自賛

開山像 自賛

虚堂像 曇西澗賛

礼間

仏眼像 自賛

子昂三行墨蹟

鳳凰

文鑑

富士

墨蹟

対幅四

—— 冬秋夏春

探幽

葵 舜 拳

菊 趙 昌

葵 舜 拳

山水人物

—— 王卿

山水人物

—— 対幅三

玉潤

猫

趙昌

牡丹

雪舟

双雀

顔輝

四睡

同

—— 山水

夏明遠

山水

同

—— 山水

—— 対幅三

本覚禪師墨蹟

利久文 守瓢庵

通門遠記 江月筆

謝書 常照禪師筆

宗及号 同筆

試春偈 普通國師筆

宗達
取聖筆

五祖 印月江贊

三祖 砥平石贊

初祖 端原叟贊

觀音 月壺

二祖 心竺二贊

四祖 逸樵隱贊

六祖 芝靈石贊

大燈 仮名文

宸翰 大燈写

華叟墨蹟

達磨像 大聖國師贊

大燈法語 同筆

四祖五祖 伝庵贊

德山像 実伝贊

建
語
本
到
筆

寒山 顏輝

拾得 同

仁叔 墨跡

觀音 清拙画贊

海棠 舜拳白贊

山水 玉潤

默庵号 一山筆

一行書
一山國師墨跡
南無慈悲万行菩薩

山水
馬遠

猿猴 牧溪

布袋 顏輝

猿猴 牧溪

梅月 同

四明天童……

觀音 雪舟

松 同

芦雁 羅窓筆

明正院御筆消災咒

一卷

密庵和尚墨蹟

一幅

南浦和尚墨跡 泉州人伊丹屋宗哲寄附

表具は小堀遠州所命也

一幅

蘭溪和尚所書金剛經 折本

一部

大燈国師所書濟大川録

二冊

栗柿牧溪筆 相阿弥外題有之

菓子絵と云

二幅

誠子内親王所書俊成卿定色紙

一軸

妙吉祥院所書六歌仙

一軸

千利休寄瓢庵一文

一幅

雨中軸付申候まゝそり可申候又

ゆがみ申候はゞ御なをし可有候 かしく

利 休

瓢 庵 老

堆朱香合 樹下人形紋大一文字 円香筥まるなり小堀遠州寄附 一箇

印土茶碗 千利久所藏宗及伝レ之 一箇

唐物丸壺茶入 箱蓋遠州書之 丸つぼ 一箇

同 文琳茶入 箱蓋に翠岩すゐがん和尚書

筑紫文琳

袋崩黄宝尽し段子

大通菴

大通菴は宗及が父津田

宗建が菴なり

同 鶴頸茶入 箱ノ蓋は江雪和尚ノ筆 一箇

鶴頸唐物

飛葉瓢箪茶入 箱蓋に両筆あり 一箇

瓢庵 江雪

油滴天目 小 黒く薄紫に白星内外にあり 一箇

曜変天目 黒く瑠璃色の有星 黄色白色に交る 一箇

台 油滴に添 小振菱花形青貝菊文 ホフヅキ内不残朱塗 一箇

足内に彫付 ■ ■ 目ノ字カ

盆 丸盆添黒塗菱形 一箇

外ノ縁曲

内赤盆 丸内外朱塗の椽に牡丹、菊、梅、山茶花、

此四品を彫刻す香台の内黒塗 一箇

茶杓 宗及作 筒に更幽作とあり 自筆といふ 一本

尚当山の什宝数百品ありといふ。くはしくこれを見知せざれば記す事能はず故にこゝ略す。

塔頭絵様

○りやうせんとうぜんじ靈山徳禪寺〔開祖てつをう徹翁和尚、諱義亨、いみなぎかう嗣開山大燈、応安二年九月九日寂す、賜三天応大現国師。相伝ふ、寺前に池築

山あり、山中に玲瓏閣竹影閣あり、池中へ舟を泛て往来す、今の松源、養徳及び寺前の民家みないにしの靈山の境内なり。今の養徳の前庭、安居院門あぐゐ西北の隅、なほかの池の旧岸あり、みな田隴となる。応仁の火後泉南の宗臨再興、

今三門の東南にあり、塔頭第一位なり。春日神祠を鎮祭る」

客殿襖 龍虎画 狩野探幽筆

○如意菴にょいあん〔密伝正卯禪師言外宗忠和尚応安中所レ創也。塔所ご後なら奈良帝てい〕

如意菴額 後奈良帝宸筆

客殿中之間 墨画山水 狩野古法眼筆

檀那間 墨画西湖図 同筆

○大用菴たいようあん〔大機弘宗禪師きこうしゅう華叟宗曇和尚けさうしゅうどん、及び宗慧大照禪師しゅうゑだいていしゅう養叟和尚やうさうの開創なり。応仁後、宗臨興復旧方丈の北にあり、

其後松源の門内にうつす〕

客殿中間 古法眼筆

礼之間大書院 小栗宗丹筆

〔即今松源院客殿是なり〕

○松源院しょうげんあん〔正統大宗禪師せいとくたうしゅう春浦宗熙和尚しゅんぷしゅうぎ創之。松源院額、春浦和尚筆〕

客殿中間 墨画花鳥 古法眼筆

礼之間 墨画山水 周文筆

旧客殿中之間

相阿弥筆

礼之間 宗律

〔永祿十二年冬以二大用松源_二為_二一院_ト、客殿は古への大用也〕

○真珠菴_{しんじゆあん}〔一休宗純和尚の塔所、嗣_二華叟_二、文明十三年十一月廿一日寂す、八十八歳〕

〔永享年中建、応仁の火後宗臨一休和尚と心を同じうして、当山の伽藍_{がらん}及び諸院を重興して次第に落成す。宗臨等師に請て此庵を営んとす、師辞して云、先師の塔所悉く兵火す、これを造らば幸甚_{かうじん}ならんのみ、於是_{こゝにおいて}先づ如意大用等の祖塔を営す。功終つて後一休和尚薪村_{たきむらしうおんあん}酬恩菴_{しうおんあん}に寂す、宗臨_{そうりん}乃前志_{ぜんし}を續て当庵を新建_{しんこん}して師の塔所とす、方丈の北にあり。宗臨は泉州堺の人、俗名尾和四郎左衛門、文亀元年十一月廿日歿、法号祖溪〕

客殿中間 墨画花鳥 曾我蛇足筆

礼間 墨画真山水 同 筆

書院 草山水 同 筆

檀那間 四 皓 長谷川等伯筆

衣体間 親子猪頭 同 筆

何似之額 一休和尚筆

○養徳院〔仏心大弘禪師実伝宗真和尚塔所、初は祇園の地にあり、後世当山に移す、徳禅院の南にあり。養徳院殿贈従一位左大臣源満詮、称_ス後小川殿、_ト応永廿五年正月十四日薨（五十一歳）足利義詮の男義満と同母の弟なり、母は八幡善法院通清法印の女なり〕

客殿中間 芦 雁 小栗宗丹筆

礼間 墨画山水 周文筆

檀那間 薄彩色琴碁書画 同 筆

衣鉢間 墨画山水 小栗宗丹筆

○〔南〕竜源院〔仏慧大円禪師東溪宗牧和尚塔所、本山の南にあり、東溪の児孫を称して南派といふ〕

〔永正年中能州大守畠山修理大夫義隆造立す、此義隆天正二年家臣遊佐氏が為に鳩殺せらる〕

客殿中間 墨画列山 等伯筆

礼之間 薄彩色山水 同 筆

檀那間 墨画猿猴 同 筆

龍源院額 朝鮮人梅屋筆

○〔北〕大僊院〔正法大聖禪師古岳宗旦和尚塔所、本山の北にあり。故に北派といふ、永正年中に建〕

客殿中問 墨画山水 相阿弥筆

礼間 墨画耕作 狩野雅楽助筆

檀那間 彩色花鳥 古法眼筆

衣鉢間 墨画祖師之図 同筆

大書院 朱買人西王母大公望 同筆

庭中名巖 有二十員 林泉 相阿弥作

法螺石 布袋石 神鞍石 観音石

沈香石 宝山石 伏虎石 釣舟石

臥牛石 仙帽石 弘子石 仏盟石

仏子石 独醒石 明鏡石 不動石

靈龜石 座禪石 真珠石 扶老石

○(南日暮御門ノ内) 興臨院〔仏智大道禪師小溪紹応和尚塔所、天文年中能州畠山左衛門佐義綱建立、法号興臨院伝翁

徳胤、天文十四年七月十二日卒〕

〔加州大守大納言前田筑前守菅原利家卿重修す、法号高德院贈一位、慶長四年閏三月三日卒、六十二歳〕

客殿中間 墨画山水 古法眼筆

礼間 彩色花鳥麝香猫 同 筆

檀那間 彩色 土佐光信筆

興臨院額 為日本国天啓和尚大明梅屋方伯行書 此十六字あり。

○(南) 瑞峯院〔普応大満国師徹岫宗九和尚塔所、興臨の南に在り。天文二年大友左衛門督義鎮造立、義鎮は大友修理

大夫義鑑の男、天正十五年五月廿三日卒、五十八、号瑞峰院休庵宗麟。〕

客殿中間 墨画七賢四皓 巢父許由 古法眼筆

礼間 薄彩色花鳥 松榮直信筆

檀那間 彩色堅田図 土佐光信筆

瑞峰院額 後奈良帝宸筆

○(北) 聚光院〔方丈の北にあり、祖心本光禪師笑嶺宗新和尚塔所、永禄九年三好左京大夫義継父修理大夫長慶の為に

建立す。長慶は永禄七年七月四日卒す、阿讃土予の四州及び泉河の二州等を領す、義継は天正元年十一月六日河州若

江に於て信長の為に自殺す〕

客殿中間 墨画松竹梅芦鴈 狩野永徳筆

礼、間 墨画山水 同 筆

檀那、間 琴碁书画泥引 同 筆

○(北) 総見院〔白毫院旧跡建之、大慈広照禪師古溪和尚、大悲広通禪師玉甫和尚の両祖とす、聚光の西にあり。天正

年中秀吉公右大臣信長公の為に建之、信長は天正十年六月自殺、四十九歳、号二総見院殿従一位太政大臣。○秀吉公

は慶長三年八月十八日薨ず、六十三歳〕

客殿中間 墨画山水 長谷川等伯筆

礼、間 墨画山水猿猴鶴 同 筆

檀那、間 墨画芦鴈 同 筆

○(南) 黄梅院〔靈山徳禅の西にあり、仏通大心禅師春林和尚塔所。天正十一年中納言従三位小早川左衛門督隆景の造

立、隆景は慶長二年六月十二日卒す、六十四歳。号二黄梅院殿泰雲紹閑。隆景の子金吾秀秋、甥輝元相尋為二外護。〕

客殿中間 七賢人 等顔筆

礼、間 墨画芦鷗 同 筆

檀那、間 墨画西湖図 同 筆

○(南) 三玄院〔総見の南にあり、大宝円鑑国師春屋和尚塔所。浅野紀伊守幸長、森蘭丸長定、森長門守忠政等為二檀

〔幸長は彈正少弼長政の男、号ス清光院春翁宗雲、居城紀州和歌山城、領三十七万石ヲ、慶長十八年八月廿五日卒す。長定は森三左衛門可成の男、天正十年六月二日戦死、廿二歳、濃州岩村城主領五万石ヲ。忠政は蘭丸らんまるの弟、寛永十一年七月七日卒す、五十七歳、作州津山城主領十八万石ヲ〕

客殿中間 墨画山水 等 伯 筆

礼間 同 山水 同 筆

勅使間 同 人物 同 筆

北間 同 柳燕 同 筆

○(南) 金鳳山きんほうさんてんずるじ天瑞寺〔総見の西にあり、仏機大雄禪師玉仲和尚塔所。天正十六年秀吉公、為ニ先妣ひざうじゆん贈准三后じゆん従一位

春巖しゆんがんたいふにん大夫人だいふにん鼎建す、法名天瑞寺宗桂と号す、世に称おほまんどころト大政所、文禄元年七月廿五日逝す、八十歳〕

客殿中間 惣えいとく金彩色松一式 狩野永徳筆

礼間 同 彩色竹一式 同 筆

檀那間 同 彩色桜一式 同 筆

衣鉢間 同 彩色菊一式 同 筆

大書院 墨画山水 同 筆

東 間 墨画箔少し三笑図 同 筆

北 間 同 富士山 同 筆

○(南) 正受院〔龍翔の南にあり、広徳正宗禪師清庵和尚塔所。蜂屋出羽守頼隆造立、関長門守一政再造〕

客殿中間 墨画列仙 狩野興以筆

礼 間 同 山水 同 寿石筆

檀那間 同 山水 尚 景筆

○(南) 大慈院〔瑞峰の西にあり、仏国大安禪師天叔和尚塔所。天正年中建立、大友左衛門督義鎮の女見性院、信長公

の女兄安養院、村上周防守義明蓬雲院殿、山口左馬介弘定梅林院殿等、檀越也〕

客 殿 一式花鳥山水 等 伯 筆

○(北) 高桐院〔大慈広通禪師玉甫和尚塔所〕

〔慶長年中参議従三位細川越中守忠興造立。忠興初め居丹後田辺城、中頃移豊前小倉城封三十八万石、其後関原の

役に軍功あるをもつて、忠興の男越中守忠利を改て肥後州に封じ、領五十四万石、忠利父を迎て本州八代城に居、忠

興正保元年十二月三日逝、八十三歳、号松向寺殿三斎宗立居士、乃ち玉甫和尚の甥なり〕

客殿中間 墨画樹木一式 等伯筆

礼間 柳に驢馬 同筆

檀那間 蚕室 囿梁楷真筆写 長谷川五代目等伯也

衣鉢間 千鳥 等伯筆

大書院 山水 同筆

○(北) 玉林院〔高桐の南にあり。大興円光禪師月岑和尚塔所。慶長年中養安院法印真瀬氏正琳造之。元和七年回祿に

及ぶ、月岑自ら衣盂を整て重建す、則ち琳の字を分けて玉林と改む〕

客殿中間 墨画山水 狩野探幽筆

礼間 同山水 養朴筆

檀那間 七賢四愛堂 永真筆

衣鉢間 琴碁書画 洞雲筆

大書院 墨画鶴 探幽筆

西間 同山水 洞春筆

杉戸 一間半一枚折 松に猿猴 一間二枚 竹に鶴 一間二枚

襖 一間半二枚 松に麝香 不知筆者

○〔北〕大光院〔金龍の南にあり。大慈広照禪師古溪和尚塔所。文祿年中造立、正二位大納言秀長卿和州郡山城及び紀州泉州に於て七十万石を領す。元和年中藤堂和泉守高虎当山に移す〕

○〔秀長は秀吉公の弟、天正十九年三月廿日薨ず、大光院殿春岳宗榮と号す。其長男中納言秀俊卿、古溪和尚を請じて創大光院〕

○〔高虎は寛永七年十月五日卒、年七十五歳、号寒松院殿〕

客殿中間 墨画七賢四皓 永真筆

礼間 墨画夏景 同筆

檀那間 墨画秋景 同筆

衣鉢間 墨画冬景 同筆

大書院 墨画春景 同筆

○〔南〕金龍院〔天瑞の西にあり。仏性心宗禪師伝叟和尚塔所。慶長年中金森五郎八長近造立、信長公の冥福を薦て、初め長松和尚を請じて住持なさしむ、故有て当山を擯出して後、改て伝叟和尚を請ず〕

○〔長近は兵部卿法印と号し、飛州高山城に居ず〕

客殿中間 山 水 長谷川等伯筆

礼間 四愛堂 同 筆

檀那間 大松 同 筆

衣鉢間 山 水 同 筆

金龍院額 朝鮮人黄筆

杉戸 芦に鷺紅葉鳥 四枚二枚折彩色 等伯筆

○〔南〕昌林院〔大雄殿の西にあり。旧霜軒法竜大源禅師先甫和尚の塔所。文禄年中蒲生飛驒守氏郷同長男飛驒守秀

行造立して、父の功德場とす。氏郷は文禄四年二月七日卒、四十歳、奥州会津城主百万石〕

客殿中間 七賢安信筆

礼間 山 水 同 筆

檀那間 山 水 同 筆

○〔北〕龍光院〔玉林の南にあり。大梁興宗禅師江月和尚塔所。黒田筑前守長政の父勘解由源孝高の為に造立す、長政

は筑前福岡城五十二万石、元和九年八月四日卒、五十四歳、号興雲院殿

〔孝高は天正十四年秀吉公に奉じ、豊州中津城六万石、慶長九年三月廿日卒、五十歳、号龍光院如水円清〕

聯芳堂〔院内にあり。中位に達磨像、左円鑑国師、右興宗禪師を安ず。又後陽成院第六皇子好仁親王、号高松殿、参江月一称入室弟子、当院檀越とす。又吉川美濃守広正礼江月一問法、其父藏人頭侍従広家の遺命を以て立墓於当院、広家居防州岩国城領六万石、寛永二年九月廿一日卒、六十四歳、号全光院殿中岩如兼〕

客殿中間 唐松仙人 等顔筆

礼間 松に仙人 等伯筆

檀那間 真山水 等顔筆

衣鉢間 金山寺の図 同筆

大書院 草山図 同筆

杉戸 一間半式枚唐獅子四疋 同筆

○(北) 芳春院〔直指心源禪師玉室和尚塔所。慶長年中加州金沢城主中納言前田肥前守利長の母華岩夫人造立、此夫人加州大納言利家卿室土方掃部助女、元和三年七月十六日逝、号芳春院華岩宗富。又後陽成院第七皇子一条関白昭長公(法号慧観)為当院檀越〕

吞湖閣〔横井氏田屋等造る〕又有飽雲亭打月橋。

客殿中間 薄彩色祖師図 深幽筆

礼間 墨画獅子牡丹 同筆

檀那間 薄彩色四愛堂図 同筆

衣鉢間 墨画山水 同筆

大書院 薄彩色花鳥 同筆

小書院 墨画山水 同筆

〔右二十四塔頭由致は龍宝記を抜藥す〕

○寮舎

○龍泉庵りようせんあん〔松源院寮舎、陽峯和尚塔所。明応年中多賀豊後守高忠子孫為檀越〕

客殿中間 西湖せいこ図 興意筆

礼間 人物 同筆

衣鉢間 耕作かうくわ図 同筆

檀那間 梅花 同筆

大書院 柳木斗画 同筆

杉戸 一間二枚 竹に鶴 彩色一間二枚 野雉 已上六枚共に 同筆

○（北）清泉寺〔三玄院寮舎、開基実伝和尚、中興伝外和尚。旧伏見もとにあり、前には宇治川うぢの流、後には木幡山こばたの麓に
拋る其清流を臨のぞしゆへ清泉せいせんといふ。慶長年中に立、今栽松軒さいしょうけんといふ、大憊の西にあり〕

客殿中間 薄彩色山水 等伯筆

礼間 四愛堂 同筆

檀那間 琴碁書画 同筆

衣鉢間 山水 同筆

大書院 山水 同筆

○瑞源院ずるげん〔芳春院の寮舎、大光の西にあり。江月を開祖とす。水野日向守源勝成所造、備後福山の城主なり〕

客殿中間 墨絵人物 等益筆

礼間 山水 同筆

檀那間 耕作 同筆

○寸松菴すんしょうあん〔龍光院子庵江月を開祖とす、元和七年造立。佐久間將監実勝領一万石〕

客殿中間 曲水 探幽筆

礼間 雪中山水 同筆

檀那間 花鳥 同 筆

衣鉢間 西湖八景 同 筆

書院 蒙求、袋棚菓このみ（茄子、葡萄、栗、瓜） 同筆

同額がく 風水洞ふうすいどう 林道春筆はやしたうしゆん

額 古松菴 瀧本昭乘翁筆たきもとせうじようをう

廊額 空步廊 同 筆

○梅岩菴ばいがんあん〔瑞峯院寮舎、天祐和尚塔所〕

客殿中間 松竹梅 狩野興也筆

礼間 花鳥 別所如閑筆べつしよじよかん

檀那間 八景 同 筆

大書院 人物 同 筆

衣鉢間 人物 同 筆

○高林菴かうりんあん〔芳春の寮舎、芳春の裡にあり、玉舟和尚塔所。慶長中立。其後寛永中片桐石見守貞昌再建、貞昌は和州小泉

邑領一萬石〕

客殿中間 山水探幽筆

檀那間 人物同筆

礼間 山水安信筆

衣鉢間 山水益信筆

大書院 山水常信筆

玄妙額 後西院帝宸書

○(北)見性庵〔瑞峯寮舎、三玄の門内にあり、万江和尚塔所。慶長中立〕

客殿中間 七賢

礼間 林和靖等益筆

檀那間 真山水同筆

衣鉢間 山水同筆

○常楽庵〔玉林の子庵、古溪和尚所造、後廢す。細川越中守源綱利侯大岸和尚を請じて重興〕

客殿 松竹梅一式 狩野永納筆

○孤蓬菴〔龍光院子菴、江月和尚為開祖。小堀遠江守政一造立、政一正保四年二月六日卒、六十九歳〕

客 殿 山 水 周ちか信のぶ筆

礼 間 松 竹 梅 同 筆

檀 那 間 同 筆

書 院 山 水 探 幽 筆〔此書院を直入軒といふ、寛永年中小堀喜太夫建る、小堀濂州の父なり〕

仏 間 額 孤 蓬 菴 松花堂猩々翁筆

○碧玉菴〔天正年中藍溪和尚開創。立花飛驒守宗茂檀越、居城筑後柳川、領十二万石、林泉藤村慵軒作〕

〔什宝に細川玄旨幽齋所持の文台硯筥あり。当寛政十年午の秋九月、紫式部の碑碣をこゝに建る、古墳は雲林院の卯辰の方式町許田隴の中にあり、都名所図会拾遺に出せり、碑は故障ありて当菴に建るなり。銘は畑維龍、由致は井後氏久米女、財主は浪花五十川菅正斉田中督榮なり。九月中旬碑を建るの日供養の法筵あり、観音懺法、奏楽一越調音取賀殿迦陵頻急胡飲酒羅陵王武徳楽。伶官七人岡、東儀、林、三家勤之〕

紫 式 部 碑 (扁額隸書)

紫姫者、越前守藤為時女也、生而穎悟、才徳夙著、姫兄惟規嘗読レ書、姫在レ傍暗誦不レ失ニ一字、父撫其背曰、恨不レ令ニ汝コトヲ為レ男也、為時雅通ニ經史、迺以ニ其学ニ悉授レ姫、■三年稍長、給ニ事御堂公家、尋侍ニ上東門院、既而適ニ左金吾宣孝、生ニ二女、亡レ幾宣孝歿矣、姫持操甚堅、独与ニ其女ニ居、覃レ思読レ書、通ニ五經三史、涉ニ仏老百

家、詞藻富贍、逸思如湧、永延之朝有二十才女、紫姬為之冠、内命著編新語、姫乃著源語六十帖、進呈焉、外託艷詞、内存諷諭、意匠結構、藻婉麗、前無古人、実女史之大手筆也、時之哲匠不能贊一辭也、姫有容色、貴介公子以歌通殷勤、姫拒之亦以和歌。其詞婉曲、而貞烈不可奪也、其它事實、詳于源語諸註及日記等、卒葬城北雲林院、今在院東南數百步、但墳揄存已、今茲寛政乙卯有尼師、傷其日就荒廢、募緣四方同志建之碑、令維龍銘焉、銘曰、

猗与斯人

窈窕淑貞

德斯美也

若瑶若瓊

雲鬢霧鬢

歛采榛荆

管之

日星岷明

爰建爰勒

永存令名

寛政七年歲次、旃蒙単闕、小春日

鶴山畑維龍子蝮甫識

紫式部のふるき跡に、猶も朽せぬ石ふみつくらむ事を、年来おもひはかる、尼君のせちなる心ざしをたすけ侍る人のありて、今茲寛政午の秋、万と、のほり事なりぬ。もとの■の上に建侍るへきを、今は畠の中にしあれば、蒼生のたなつものつゝるさはりにもと、まつ辻某君のゆかりもとめておなし紫野みとりの玉の庵に、此いしふみをすへつゝ、靈牌お

さめまつりて、長月中二日、法の庭に緇素つとひよりて、誦經香花の供養したてまつるも、いとおほけなく、はたから人の聞なはいか、いふらんとつ、まし、されと名のため世の聞えを貪るにあらず、た、かしこき跡をあふきしたふの余なり。抑尼きみの願ひは、四方の人くに和歌こひて、碑をもいとなまはやの心にて、閑田翁慈延ひしりの学匠たちにも言葉をかり、かつ畑維龍のぬしに是が銘たのめるま、此よしをしるし給へりしかと、出る息の入るをもまたぬよの中の、いとうしろめたく心いられて、浪華なる正斎のぬし督榮のぬし心をあはせていとなみつくれるなりけり。又はやくよりうた奉れしもろ国の人々の手向をも、けふ此法の場にてこそと、折しも東のかたにみやつかへすなる林伶官のおとめ子と、もに、物の音の博士これかれ詣給へるを、やをらそ、のかして糸と竹とのしらへにそへて、敷しまの道の榮えも猶いくよ、に絶せしの心計になん。

たむけする身はいとふとも紫のゆかりに染よ言の葉の露

井後氏 久 女子

○〔当山之寮舎子菴、名画名筆頗多し、繁によつてこ、に略す〕